

▼ 『東方』305号より

一 日中関係史研究の確かな到達点を開示し新たな研究水準を開扉する工具書の登場
▲ 松重 充浩

『東方』三〇五号より

日中関係史研究の確かな到達点を開示し 新たな研究水準を開扉する工具書の登場

松重 充浩(日本大学)

本書は、近年の日中関係が「憂うべき状況」(「まえがき」iii頁)にある中で、「如何に相互理解を深め、相違を認めつつ対立から協調の併立関係を築くことができるのか」(同前)という問題意識の下、本書編者たちにより長期に亘り真摯に積み重ねられた研究・編纂作業の成果であり、管見の限り本書に匹敵する量と質を兼ね備えた類書はなく近代日中関係史を学ぶものにとって必携となる工具書である。

本書を手にとつて直ちに分かる特徴は、年表部分のみで七二五頁にのぼるといふ従来の類書を大きく凌駕する採録事項数および記事内容の豊富さである。このみを見ても、本書が今まで蓄積を重ねてきた日中関係史の豊富な実証的成果を誠実に反映した労作であることは一目瞭然である。評者は、このような労作をまとめ上げるために本書の編者たちが長期に亘り払った多大な努力と作業量に心からの敬意を表するものである。

しかし、本書の特徴は、その採録事項・記事の量的充実ぶりのみにあるのではない。評者の目を特に引いた本書を他の類書と分かつ大きな特徴は、編者たちが自らの問題意識を追究する上で必要と想定した方法的特徴を本書構成上の形式に結実させている点にある。

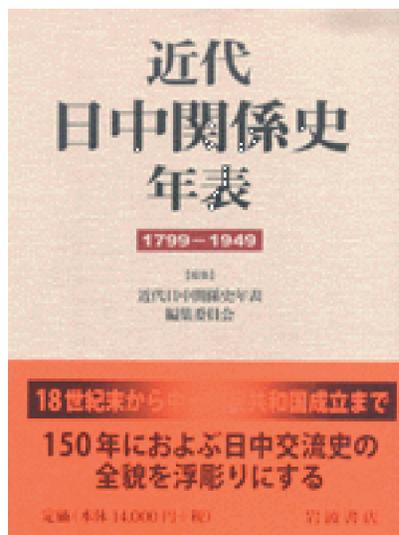
本書「まえがき」では、前述した編者たちの問題意識を追究する上で、近代日中関係の対立面のみならず相互依存

▶ トップページにもどる

近代日中関係史年表編集委員会編

『近代日中関係史年表』

B5判・八一八頁・岩波書店・一四、七〇〇円



面をも反映した「確かな認識」(同前)獲得の必要性が示されている。同時に、その認識獲得の方法として、日中間の「政治的関係に加えて経済・社会・文化など様々な側面における関係、ひいては敵対する国家間の枠内では捉えきれない人的関係なども含め、両国の各領域の歴史的事実を日中関係史のなかに位置づける」(同前)ことが作業仮説的に提示されている。そして、本書の特徴は、この作業仮説的に提示された方法を効率よく遂行していくための創意工夫を本書構成上の形式において施している点にある。その典型的な事例が、年表欄の割付方法と充実した索引等の年表以外の部分である。

まず、年表欄の割付方法であるが、本書は、見開きの左右両頁を一杯に使用して左から右に「日本」↓「日中関係」↓「中国」↓「国際環境」という順で割付がなされている。この日中関係事項を日中両国内事項で挟み込む割付は、本書利用者をして日中関係事項と日中両国の国内事情とが如

何なる相互連関性を持つものだったのかという考察へと誘う上で極めて有効な形となつていると言えよう。同様に、国際環境事項も、見開き右頁の右端という日中関係事項および日中両国国内事項を言わば大きく包み込む位置に配されることで、国際環境事項と他の諸事項との相互連関性への配視を促す形がとられている。加えて、日中関係欄内を、「政治・軍事」、「経済」、「社会・文化」の各欄に更に区分することで、従来看過されがちだった日中関係の多様性や重層性を看取りやすくなるような工夫もなされている。

しかも特筆すべき点は、以上の各欄内における各記事の年月日の横軸が本書全体を通じて正確に揃っていることである。例えば、いわゆる「五・四運動」の開始日とされる一九一九年五月四日の日中関係欄の記事を確認し、同日に日中各国内および国際環境で何があったかを調べたければ、視線をそのまま直線的に左右へスライドすれば該当記事を確認できるという割付がなされているのである。これは、一見すると年表ならば当然と思われがちであるが、本書のような膨大な分量がありながら、各欄の横の時間軸が全ページに亘って揃っている年表を評者は寡聞にして知らない。むしろ、評者の経験に即して言えば、年表における各欄間における横の時間軸の多少のずれは普通のことであり、ひどいものになると該当事項の同時期事項を探すのに次頁をめくらなければならぬものさえあるとの印象を持っている。いずれにせよ、各欄の横の時間軸が揃えられたことは、各欄間の同一時期における事項確認の効率化を可能とし、各欄間の相互依存関係を追究するという本書の目的の実現に資するところが大きくなつていると言えよう。さらに、この各欄の横の時間軸統一は、各欄内の事項間スペースを生み出すという思わぬ副産物も本書にもたらしている。そ

▶ トップページにもどる

れは、単に各事項の読みやすさが担保されたと言うだけではなく、今後の研究の進展に則して本書利用者が自由に追加事項を書き加えていくことができるスペースが確保されていることを意味するものであり、本書が利用者の要請に合わせて言わばカスタマイズできる柔軟性を備えることとなつていることを意味するものでもある。

次に、索引等の部分の充実ぶりである。本書に添えられた、年表上の年月日を付した掲載記事全般に亘る事項索引と人名索引の存在が、本書の利用上の利便性を大いに高める上で役立っていることは衆目の一致するところであろう。だが、それにもまして、評者が特に賛辞を呈したいと考えているのが、本書に「典拠文献一覧」が添えられ、各年表記事の典拠文献が明示されている点である(但し、国際環境欄は、日中関係、日本、中国に直接関係する記事のみの記載)。

日中関係史研究者にとつては周知の事実に属することでもあるが、近代以降といえども日中関係諸事象の年月日や事実関係の確定には意外と骨が折れることが多い。典拠とする資料によつて年月日や事実関係を示す内容に差異のある場合が多々あるからである。この事実は、年表記事内容の典拠となった資料を開示しておくことが、年表の信頼性を利用者に対して検証可能な形で示す上で不可欠な要件であることを意味している。別言すれば、個々の年表記事の典拠明示は、年表作成者側に要求される利用者に対する不可欠な説明責任なのである。しかし、この当然とも言える説明責任の遂行も、他の類書では十分果たされていないのが実情である。本書では、この従来の類書が持っていた問題点を、おそらくは煩雑きわまりない調整作業を編者間で何度も何度も繰り返すことを通じて克服したものと推察さ

れる。そして、この成果により本書は、単なる事実確認の年表という範疇を越えた、今日の日中関係史研究における資料水準をも示す工具書となっているのである。

以上述べてきた通り、本書は、利用者が頁をめくる毎に、時々の日中関係を、その多様性と重層性への配視を担保しつつ、日中両国内状況はもとより正しく世界史的規模での連関性をふまえつつ一望できる構成上の形式内容を持つものとなっている。しかも、そこには利用者自らの発想と考察が自由に展開し得る十分なスペースと情報も提供されており、利用者が自らの資料的限界を突破し新たな事実の発掘や認識構築に向かつていく契機が多分に含まれているとも言えよう。その意味で、本書は、従来の日中関係史研究成果の到達点を明示することに止まらない、新たな研究水準追究へと利用者を誘う内容も包含するという、従来の日中関係史年表が十分果たすことができなかつた水準の獲得に成功した画期的な一冊であると言えよう。評者が、本書を「必携」と評する所以でもある。

冒頭で述べた本書編者たちの問題意識は、「国際化」(globalization)と呼称される世界的規模で展開する相互連関・相互変容が、様々な国家や地域、あるいは諸団体間の激しい切り結びの繰り返しの中で進展する現状をふまえる時、日中関係に限定されない今日の状況一般に底通するものであることは明らかであろう。諸主体間の激しい切り結びが凄惨な状況をもたらしつつある現実と、自らの主張を単に声高に連呼し続けるか、相互依存や相互変容の視座を欠いたまま己を棚上げにした正義を振りかざし相手をおたかも折伏対象と見なし接することをコミュニケーション・スキルと称して憚らない輩が跋扈しているかに見える現状を正面から受け止めながら、それとは全く異なる形で

▶ トップページにもどる

の「関係」が如何にして可能なのかを、近代日中関係史を通じて追究しようとする本書編者たちの姿勢は重く切実である。本書が、一人でも多くの人に読まれ利用されることを切に願う次第である